

法然上人の宗教的立場

— 〱偏依善導〱の意味において —

三 枝 樹 隆 善

序 説

宗祖法然が強調したのは、いうまでもなく〱選擇本願念佛〱であつた。この選擇本願の念佛は、すなわち善導の説いた口稱稱名の一行に歸せられる。しかしながら、善導の念佛觀と法然のそれとは本質的にはもちろん同一であるが、宗祖法然が独自の立場から〱念佛には助をささぬなり〱と述べて〱勝〱の義を明らかにしているところに、善導の主張をさらに展開した宗教的卓見が窺われるのである。インドからシナへそしてシナから日本へとうげづがれた淨土教は、宗祖法然によつてはじめて日本的に展開されたのであるが、とくに宗祖法然が『選擇集』の中において〱偏依善導一師〱と述べていることは、かれの宗教的立場を明確に示しているといえるであらう。望西樓了慧が『和語燈錄』に集載した〱なげきなげき經藏に入り、かなしみかなしみ聖教にむかいて、てづからみづからひらきみしに、善導和尚の觀經の疏にいわく、一心專念彌陀名號云云〱の文は、生死解脱を求める法然をして、罪業深重の凡夫救済の大信法となつた。かかる法然に與えた善導の釋義は、阿彌陀佛の大悲が選擇本願念佛として、一宗獨立への宣言となつたのである。〱一心專念彌陀名號……乃至……順彼佛願故〱という善導のことばは、かれ自身

の宗教的思想的立場を端的に、しかも根本的に示すものであつて、宗祖法然が偏えに善導に依られたことは、このような宗教的思想的立場において意味づけられるものと思う。

△偏依善導▽は、法然教學依憑論上重要な意味をもつことがらである。誰しも引いて用いることばではあるが、單に讃仰あるいは歸依というような意味に理解される場合も少なくない。私は、そのような一面のうすい意味づけで考えたくはない。あるいはまた、かの明慧が『推邪輪』の中で△然し善導の釋を披閱するに全く此の義なし▽とか、一文一句に拘つて難じるような、けちくさい考えをもつて理解したくはない。あるいはまた△分依善導▽というような、はなはだしい見解によつて意味づけたくもない。私はもちろん、そのような見解は許されることは知っている。が△偏依善導▽とは、どこに中心をおいてのことからであるか、ということを理解しなければ、宗祖法然が標榜された眞の意味はうしなわれると思う。

(一)

周知のことであるが、とにかく宗祖法然が△偏依善導一師▽を標榜する理由を、主著『選擇集』によつてあげてみよう。第十六章私釋段には、次のような問答が述べられている。

問曰、華嚴・天台・眞言・禪門・三論・法相・諸師各造淨土法門章疏、何、不レ依ニ彼等師ニ唯用ニ善導一師ニ乎、
答曰、彼等諸師各皆雖レ造淨土章疏、而不レ以ニ淨土爲レ宗、唯以ニ聖道ニ而爲ニ其宗、故不レ依ニ彼等諸師ニ也、善導和尚、偏以ニ淨土ニ而爲レ宗而不レ以ニ聖道ニ爲レ宗、故偏依ニ善導一師ニ也

これは、宗祖法然がその理由をあげる第一の問答であるが、かれの宗教的、思想的立場において、まったく聖道

門的立場にある諸師によらないことを示し、そして、純然たる淨土をもつて宗とする善導の宗教的立場によることを明示されたものである。それでは第二の問答は、次のごとくである。

問曰、淨土祖師其數又多、謂佛法寺迦方・慈愍三藏等是也、何、不レ依ニ彼等諸師ニ唯用ニ善導一師ニ哉

答曰、此等諸師雖レ宗淨土ニ未レ發ニ三昧一、善導和尚是三昧發得之人也、於レ道既有ニ眞證一、政且用レ之

問われるごとく、淨土門的立場にあるものは、善導以外に多くあることでありながら、なぜ、善導だけに依るかということは、善導は、これ△三昧發得√の人であるからと、宗教的身證にその重點が置かれている。しかし、それならば、第三の問答は次のごとくである。

問曰、若依ニ三昧發得ニ者、懷感禪師亦是三昧發得之人也、何、不レ用レ之

答曰、善導是師也、懷感是弟子也、故、依レ師不レ依ニ弟子一也、況、師資之釋其相違甚多、故不レ用レ之

宗教的身證に重點を置くならば、懷感もまた△三昧發得√の行者である。なぜ、善導によらなければならぬか。なるほど、懷感は善導の指導をうけて、念佛三昧を得たことは『宋高僧傳』の傳えるところである。しかし、懷感は善導の弟子である。弟子によつて師によらないという方はない。そしてまた懷感と善導とは、その釋義においてはなほだ相違の點が多い。と理由づけることは、宗祖法然の教學思想の立場において、反するものが多いということである。それでは第四の問答は、

問曰、若依レ師不レ依ニ弟子一者、道綽禪師者是善導之師也、抑、又淨土祖師也、何、不レ用レ之

答曰、道綽禪師者、是雖レ師未レ發ニ三昧一、故自不レ知ニ往生得否ニ云云

それならば、道綽は善導の師である。なぜ、道綽によらないで善導によるのであろうか。道綽は△三昧發得

∨の行者に非ずと断定して、『新修往生傳』に傳える往生の得否∧花不萎悴∨の問答をもつて、その理由とされている。ところが、この∧花不萎悴∨の問答は、諸傳ひとしく載せるところではあるが、『傳』によつて主客が異つてゐるのである。宗祖法然は、相承の師として淨土教の五祖の傳記を『類聚淨土五祖傳』としてまとめられてゐるが、この相違を無視されることもなからう。しかしながら、宗祖法然が善導を主とする『新修往生傳』の一説をとつて、その理由とすることは、何か深い意味がなければならぬ。宗教的に、一にも二にも善導とするかれの思想的立場が、文献考證を越えてだれびとも動かすことのできない信念のあらわれを感じるものがある。いたづらに、史實の價值を批判し得べきものでもない。次の文を味讀するならば恐らく十分であらう。

爰知_二善導和尚_一者、行發_三三昧_二力堪_三師位_一解行非_レ凡將是曉矣、況又時人諺曰、佛法東行已來未_レ有_三禪師盛德_一矣、
 絕倫之譽不_レ可_三得而稱_二者歟、加之、條_三錄觀經文疏_一之刻頗感_三靈瑞_一、屢預_三聖化_一、既蒙_三聖冥加_一然造_三經科文_一、
 擧_レ世而稱_三證定疏_一、人貴_レ之如_三佛經法_一、

ここにおいては、歸依の絶對の意味にとつてもよからう。單なる讃仰でなく單なる歸依でなく、まつたく、宗教的に絶對的な佛に對する救濟的な意味あいをもつものと感ずる。さらに次の文は、

靜以、善導觀經疏者、是西方指南行者目足也、然則西方行人必須_三珍敬_一矣、就_レ中每夜夢中有_レ僧指_三授玄義_一、僧者、恐是彌陀應現南者可_レ謂此疏是彌陀傳説、何況、大唐相傳云、善導是彌陀化身也、爾者可_レ謂又、此文是彌陀直説既云_レ欲_レ寫者一如_三經法_一、此言誠乎、仰討_三本地_一者四十八願之法王也、十劫正覺之唱有_レ憑于念佛_一、俯訪_三垂迹_一者專修念佛之導師也、三昧正受之語無疑_三于往生_一、本迹雖_レ異化道是一也

善導の『觀經疏』は、西方の指南行者の目足であつて、阿彌陀佛の直説である。また善導自身は、これ阿彌陀佛の

化身であることを、宗祖法然は宗教的に身證しているのである。このようなことが、宗祖法然の傳記に伝えられるように、事實はともかく、眞實として二祖對面において半金色の善導像として拜されるものでもあろう。多くの人が知るように、宗祖法然は『善導十德』を集録して鑽仰しているのであるが、これは、このような意味において偏依善導Vを強く意味づけるものと思う。A仰いで本地をたづぬれば、四十八願の法王なり。十劫正覺の唱え、念佛にたのみあり、俯して垂迹をとわば、專修念佛の導師なりV、善導とその『觀經疏』をその本質からみれば、切つても切れぬ、そのまゝがアマダであり、四十八願であり、念佛である。そして人間的にみるならば、その專修念佛の導師であり行者である。今日、われわれが感ずるものは、まつたくこのことが、宗祖法然に適切にあてはめて考えられるように思う。淨土宗學において、導空一體の説をとるA總依善導V論の立場の意味づけが、ここに存するものでなければならぬ。

さて、宗祖法然はA三昧正受の語は、往生に疑いなしVとする。絶對的な宗教的立場をもつてのぞんでゐる。そして、

於是、貧道昔披三閱茲典二粗識三素意、立舍三餘行二云歸二念佛、
と述べている。以上、『選擇集』第十六章私釋段に明示されるA偏依善導一師Vのことがらである。

(二)

『選擇集』にあげられる、宗祖法然のA偏依善導Vに對する理由は、きわめて深くして單純である。それは、善導の中心的思想の立場によることを明示するものであつて、他の何ものでもない。この單純なものを、われわれが

複雑に考えようとするところに、その眞意が失われる。そしてひいては、△總依善導▽論に對する△分依善導▽論が問題を提起する。總依といひ分依といひ、そのような論義では、眞の意味でいわゆる宗祖法然の△偏依善導▽は、恐らく理解できぬであろう。宗祖法然が、最後に示すものは△もろこし、わが朝にもろもろの智者たちのさたし申さるる觀念の、念にもあらず『一枚起請文』▽とすることは、すべての人師の説を否定するものであらう。そこには、聖道門の多くの人師の説はもろろんのこと、正統とする曇鸞の説も道綽の説も、しいては善導の説をもふくめて、すべてが否定せられる。このすべての人師の説が、否定しつくしたところに、宗祖法然の獨自の根本的立場がある。それは、人師の説に依らないことを意味するものであつて、直接的眞のものによることを意味するであらう。宗祖法然は、いわゆる善導を阿彌陀佛の化身と仰ぎ、その主著『觀經疏』は、阿彌陀佛の直説として信じてとりあつかわれているのである。このような意味において、すべての人師の説が否定されることがあつても不思議ではなからう。しかし、宗祖法然が△智者▽といわれる意味は、古來、淨土宗學の上においては、善導をふくまないものとしている。それは△智者▽ということばが、すでに聖道門の立場の人を意味するものであらうと思われるが、宗祖法然の獨立的立場においては、よつてよらないとする、獨自の立場があるはずである。私は、ここではこのような意味で考えておきたい。

さて、善導の説をもふくめて否定する宗祖法然の立場は、そのよりところを直接的なものに求められる。宗祖法然の所依が『淨土三部經』と天親の『往生論』であることは、『選擇集』第一章段に明示せられるとおりであるが、『論』はしばらくさしおいて、『三部經』の取り扱いについては、古來、多くの人師が同一ではない。ところが善導はもつとも正しく『三經』の眞の意味を把握しているとみられた。それはもちろん、善導のあらわした『觀無量

『壽經疏』を通してである。私は今一度さきにあげた宗祖法然のこゝばを味つてみたい。△しづかにおもんみれば善導の觀經疏は是れ西方の指南行者の目足なり。しかればすなわち西方の行人、かならずすべからく珍敬すべし。なかんづく毎夜夢中に僧あつて玄義をさづく。僧とは恐らくはこれ彌陀の應現ならん。しからばいうべし。この疏は是れ彌陀の傳説なり▽と、△いかに況んや、大唐に相い傳えていわく、善導はこれ彌陀の化身なりと。しからばいうべし。またこの文はこれ彌陀の直説なり、すでに寫さんと欲するものは、一に經法のごとくせよ。この言はまことなるかな、仰いて本地をたづぬれば四十八願の法王なり。十劫正覺のとなえ念佛にたのみあり。俯して垂迹をとわば、專修念佛の導師なり。三昧正受の語は往生に疑なし、本迹ことなりといえども化道これ一なり▽。説明を加えるまでもなからう。宗祖法然の善師觀はここにあると思う。本地垂迹のみかたは、善導がすでに△三昧發得▽の行者なりとみるがゆえにつかわれるものであつて、しかも△本迹ことなりといえども化道これ一なり▽とする、宗祖法然の善導觀は、普通の人師と同一視することはできない。したがつて同一視した善導は、すべての人師とともに否定せられるのである。

ところが、説明の上からは、多くの人師の説がもちいられる。いま、法然教學における教判について考えてみるならば、『選擇集』第一章段において宗祖法然は、道綽が判じた△聖淨二門▽の教判がもちいられていることは、多くの人が認めるとおりである。ところで、善導を偏依とする宗祖法然は、なぜ善導のいわゆる△二藏二教▽の教判をもちいずして、道綽の教判にしたがつたのであろうか。一應の疑問が生ずるのであろう。教判はその教學の主要の問題である。如何に解されるべきものであろうか。

道綽の△聖淨二門▽の判釋は、それが△約時被機▽を基盤として△末法今時一生造惡▽の衆生が救われる要法を

明示するものであつて、宗祖法然は『選擇集』第一章私釋段には、次のように述べられている。

凡此集中、立_三聖道淨土二門_一意者、爲_レ令_下捨_三聖道一入_中淨土門_上也、就_レ此有二由_一、一由_下去_三大聖_二遙遠_上、二由_三理深解微_一、

これは聖道門の立場を否定して、淨土門的立場を主張する道綽の思想的立場を如實に繼承するものであるが、道綽のこのような二門の判釋は、宗祖法然もさきの引用文に續いて述べているように、道綽のみに限るものではなく、曇鸞・天台・迦才・慈恩等の諸師みなこの意をもつて、それぞれの立場から判釋しているのである。しかし道綽の二門判は、曇鸞の『往生論註』に示される、龍樹の『十住毘婆沙論』における_レ難易二道_レの判釋、それに對する曇鸞の_レ自力他力_レの釋義が根據となつてゐることは、多くの人が知るとおりである。ここに道綽の_レ聖淨二門_レ判は、龍樹の_レ難易二道_レを轉化し、さらに善導において、_レ頓漸二教_レに攝取することになるであらうが、思うに道綽の_レ聖淨二門_レの教判は、淨土教的に完成された體系をもつものとして止められる。善導の_レ二藏二教_レの教判といわれるものは、道綽が主張した淨土門の價値づけと思われる。すなわち善導が『觀經疏』_レ玄義分_レの中に於いて述べることは、_レ宗旨の不同、教の大小を辨釋_レして次のごとく述べられる。

……今此觀經即以_三觀佛三昧_レ爲_レ宗、亦以_三念佛三昧_レ爲_レ宗、一心廻願往_三生淨土_二爲_レ體。言_三教之大小_一者、問曰、此經二藏之中何藏攝、二教之中何教取、答曰、今此觀經菩薩藏取頓教攝

これは、教相を判ずることに間は間違いなからうが、_レ教_レを判ずるといふよりも、_レ經_レそのものを判ずるものにとつて然るべきであらう。『般舟讚』には、_レ觀經彌陀經等の説は、すなわちこれ頓教菩薩藏なり_レと述べることならなどをもつて、善導は_レ二藏二教_レの教判に立つものといわれているのであるが、善導の立場は、常に道綽が

判じた、△聖淨二門▽廢立の上になつてゐるのであり、このことは、『觀經疏』△玄義分▽における淨土教特設のことばが適切にもの語るものであつて、善導の思想的立場が明確に示されている。そしてそこに、善導が道綽の立場を一步前進させるものは、

……然娑婆化主因_レ其清_二故、即廣開_一淨土之要門_一、安樂能人顯_レ彰別意之弘願_一、其要門者、即此觀經定散二門是也、定即息慮以凝_レ心散即廢惡以修_レ善、廻_三斯二行_一求_三願往生_一也。言_三弘願_一者如_三大經說_一、一切善惡凡夫得_レ生者莫_レ不_下皆乘_三阿彌陀佛大願業力_一爲_レ増上緣_上也。

とする、△要弘二行▽の主張である。さらにまた、聖道門的諸師の『觀無量壽經』の取り扱いについて、その謬解を論破することも、△聖淨二門▽判の思想的立場によつてなされたことはいうまでもなからう。△いま二尊の教に乗じて、廣く淨土の門を開かん▽とする、善導の立場は、道綽の中心的思想をうけ繼いでのことであり、さらに△我ら愚痴の身、曠劫よりこのかた流轉して、いま釋迦佛の未法の遺跡たる彌陀の本誓願、極樂の要門にあえり▽とすることは、明確にその思想的立場をあらわすものである。例をあぐるにいとまあらず、善導はこのような立場において『觀無量壽經』が、いや、『阿彌陀經』、『無量壽經』△三部經▽が、△菩薩藏▽であり△頓教▽であると見るわけである。善導は△われ菩薩藏・頓教一乘海によつて、偈を説いて三寶に歸して佛心と相應せん▽と述べて△三部經▽の眞の意味を、まつたく純然たる淨土門の上において顯彰したのである。

このような立場にある、善導の説を宗祖法然は、その依りところとされたと思う。それは、すなわち宗祖法然が△淨土三部經▽のそれぞれに解釋を残されているものを了慧が集録した『漢語燈錄』の中に於いて△無量壽經▽には、

正依_二善導_一、傍依_二諸師_一、并述_二愚懷_一

とあり、また《觀無量壽經釋》には、

諸師解釋雖_レ多、今則正依_二善導_一而、傍依_二餘釋_一輔_二助善導_一

と、それぞれ冒頭において、釋經についてのよりどころを明示されている。同じくまた《阿彌陀經釋》には、この經を釋せんとしてその五意をあげ、そして、その最要を論ずるに六師の説を依用して施されているが、その六師の説とは、一に善導の疏文、二に天台十疑の文、三に悲恩要決の文、四に迦才淨土論の文、五に智景疏文、六に惠心往生要集の文なり_レとして、善導を第一にされている。そしてまた、この經釋の結語においては次のごとく述べられる。

夫欲_二速離_一生死_一、且_二種勝法中捨_二聖道門_一入_二淨土門_一、欲_レ入_二淨土門_一、正雜_二行中拋_二諸雜行_一選歸_二正行_一、欲_レ修_二正行_一、正助_二業中猶傍_二助業_一選專_二正業_一、正定業者、即是稱_二彼佛名_一、稱_レ名必得_二往生_一由_二佛本願_一故也。

抑、雙卷無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經、淨土三部妙典或依_二菩薩論說_一據_二人師解釋_一講讚_二之畢_一、至_二經大旨念佛深義_一、專以_二善導和尙_一、用爲_二依憑_一焉

要するに、宗祖法然の立場は、その教判が道綽の_レ入_二聖淨二門_一判によることは、その立場として必然的本質的なものであつて、それは、善導がまつたく道綽の判じて主張する、淨土門の純然たる中にあつて、《淨土三部經》の教説が、罪惡生死の凡夫を根底として、その價值感の上において、_レ入_二菩薩藏_一であり_レ入_二頓教_一であるとするにことある。しかして、法然教學における教判が道綽に依ることは、_レ入_二偏依善導_一を立場とする宗祖法然にとつて、何等不思議はなく、このことをあげることにおいて、むしろ、善導の立場を強く反映しているものと思う。宗祖法然の

《無量壽經釋》には、△天台・眞言みな頓教と名づく。しかれどもかれは、斷惑證理なるがゆえになおこれ漸教なり。未斷惑の凡夫、ただちに三界の長夜を出過することを明すことは、偏えにこれこの教なり。ゆえにこの教をもつて、頓中の頓となすなり△と述べられるが、△頓教△は△機△に對する△教△の價値感においていわれることであり、善導の中心的立場においてなされたことと思ふ。

(三)

さて、それでは宗祖法然が善導の説を依りどころとする中心的觀點は、どこに求められるべきであらうか。三祖記主は『淨土宗要集』卷第二において、次のごとく指摘している。

凡、我大師所判超餘、尤在正雜助正分別、若此義壞則證定無據、祖師云、鸞綽雖爲相承宗師勸菩提心觀察正、和尙、異之許未發心往生、觀察爲助稱名正云云

すなわち、△散善義の助正分別△のこと、および、△附屬文の上來雖說定散兩門之益云云△の思想的立場において、要約することができるであらう。このことはまた、望西樓了慧が『拾遺黑谷上人語燈錄』卷上に、宗祖法然のことばとして集録する《淨土隨聞記》には、その要義を多く収めているが、その中に、

又一時師語曰、弘通淨土之師世多之、皆勸菩提心且以觀察爲正、唯、善導一師許不發菩提心亦得往生、又判觀察以爲稱名助業、當世之人、若不依善導意、則恐難得往生也、曇鸞・道綽・懷感等雖皆爲相承師、而、至其義則未必一準、當能辨別之、若不辨此旨於往生難易冥然有感也、

と述べられていることは、宗祖法然の思想的中心と思われる。

宗祖法然の淨土往生に對する見解は、善導が、その立場において示すとおり、 \wedge 罪惡生死の凡夫 \vee 性の基盤に立つものであるから、往生の正因とみなすものは、愚鈍の機に對處できる最易のものでなければならぬ。この觀點に立つことが、宗祖法然をして善導の立場に歸一せしめるものである。 \wedge 曇鸞・道綽・懷感等みな相承の師となす、しかし、その義に至つては、すなわちいまだかならずしも一準ならず \vee であつて、かれらは菩提心をもつて往生の正因とみなす。曇鸞の『往生論註』卷下には、菩提心は『無量壽經 \wedge 三輩 \vee に説かれる無上菩提心のことであると見えずなわち願作佛心、願作佛心はすなわち度衆生心である、度衆生心はすなわち衆生を攝取して、有佛の淨土に生れしめようとする心であると解釋している。淨影寺慧遠・天台智顛・嘉祥寺吉藏などのいわゆる聖道門諸師は、もちろん、菩提心正因説を主張するものであり、淨土門の相承の師とする道綽・懷感においても、理解するところは同じである。もちろん、その立場によつて見解の相異は認められることであるが、これらの諸師がまつたく眞の意味における \wedge 凡夫性 \vee の把握が充分でなかつたことをもの語つているといえよう。これに對して善導は、 \wedge 散善義 \vee に示すように徹抵した \wedge 機の深信 \vee 、すなわち \wedge 決定して深く信ず、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかた、常に没し常に流轉して出離の緣あることなし \vee と思想する立場は、諸師がそろえて主張する菩提心をも否定して、稱名念佛そのものに正因が求められた。それは、すなわち \wedge 散善義・就行立信釋 \vee における \wedge 正雜二行 \vee として \wedge 助正分別 \vee の \wedge 機 \vee に對する卓越なる見解、また『觀無量壽經』の \wedge 汝好持提語 \vee を付屬文として \wedge 正しく彌陀の名號を付屬して遐代に流通せしめたもうことを明す、上來、定散兩門の益を説くといえども、佛の本願に望むれば衆生をして、一向にもつぱら彌陀の名號を稱せしむるにあり \vee などと述べていることから判斷するかぎり、稱名念佛そのものをまつたく往生の正因とみなしていた、といえるであろう。また『無量壽經』の中に説かれてい

る如來の本願に對するかれの見解は、

一一願言、若我得佛十方衆生稱我名號、願生我國_二下至十念_二若不_レ生者不_レ取_三正覺_一（支義分）

若我成佛、十方衆生願生我國_二稱我名字_二、下至十聲乘_三我願力_一、若不_レ生者不_レ取_三正覺_一（觀念法門）

若我成佛、十方衆生稱我名號、下至十聲若不_レ生者不_レ取_三正覺_一、彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不_レ虛衆生

稱念得往生（往生禮讚後序）

などの第十八願の解釋は、稱名の念佛をもつて佛の願力に乗じて往生することを明示するものである。このことはとくに宗祖法然が着眼するものであつて、『選擇集』第三章段に念佛往生本願として主張することであり、善導・法然をととした宗教的卓越なる見解といふべきであらう。

善導教學の特色は、凡入報土思想と稱名正定業思想とに要約できると思うが、この立場において宗祖法然は、われ淨土宗を立つところは、凡夫が報土に生れんことを示さんがためなり云々と決意して、最勝最易の選擇本願の義による念佛を確信的に説いたのである。

結 語

周知のとおり『選擇集』第二章段は、善導の散善義の文を引いて正雜二行を比較し、もつて雜行を捨てて正行に歸し、また『往生禮讚』の順序に述べることがらをもつて、專雜の得失を明確にされている。第三章段は第十八願が念佛往生願であることを『觀念法門』、『往生禮讚』における善導の見解をもつて明し、第五章においては、第四章にあげる三輩念佛往生の外に説かれる菩提心等は、

「且依_レ善導一意_ニ而謂_レ之者、原夫佛意正直雖_レ欲_レ說_ニ唯念佛之行_一、隨_レ機一往說_ニ菩提心等諸行_一分別、三輩淺深不同_一、然今於_ニ諸行_一者既捨而不_レ歎置而不_レ可_レ論者也、唯就_ニ念佛一行_一既選而讚歎思而容_ニ分別_一者也云云」

と述べて、**△隨機▽**において菩提心等の諸行は説かれるが、しかしその功德は、念佛の大利に對して小利であるとして否定せられる。第八章三心、第九章四修法においてはいうまでもない。第十二章**△付属佛名篇▽**においては、まづたく善導の見解に立ち、菩提心等の諸行はすべて否定せられる。そして總結第十六章において述べることは**△阿彌陀經釋▽**の結語と同一の立場が

「夫速欲_レ離_ニ生死_一、二種勝法中且闍_ニ聖道門_一選入_ニ淨土門_一、欲_レ入_ニ淨土門_一正雜_ニ二行中且拋_ニ諸雜行_一選應_レ歸_ニ正行_一、欲_レ修_ニ於正行_一正助_ニ二業中、猶傍_ニ於助業_一選應_レ專_ニ正定_一、正定之業者、卽是、稱_ニ佛名_一、稱_レ名必得_レ生依_ニ佛本願_一故」

と、斷定される。

ここに、宗祖法然の善導に對する、思想的立場が明確に示されていると思う。そして、偏えに善導に依ると、いうことが、このような中心的思想の立場であることを深く意味するものである。